

『不在証明～アリバイ～』

著:愁堂れな

iii: 稲荷家房之介

「狙撃された皆さんは今、二階の食堂で待機していただいています」

こちらです、と警官が礼をし、俺たちを案内しようと踵(きびす)を返した。ロビーにはまだ椅子は余っていたというのに、被害者だけ隔離しているのには何か理由があるのだろうか、内心首を傾げていた俺の前を歩く三木が、階段を上りながら先頭の警官に問いかけた。

「なんで被害者だけ食堂なんですか。一緒にロビーに待たせりゃいいようなものですが」

彼もまた俺と同じ疑問を抱いたらしい。

「実は他の客たちが怖がらまして……」

警官の答えに、そういうことか、と頷いたタイミングも、俺と三木は一緒だった。

「もしかしてコレですか」

三木が自分の頬にさっと傷をつける真似をする。その筋の者かと——いわゆる暴力団関係者かという考えは、俺の頭にも浮かんでいた。

「ええ。青(せい)龍(りゅう)会(かい)の若頭です。本人はまあ優(やさ)男(おとこ)なんですけど、ボディガードがいかにもという感じで……」

青い龍の会と書く、と聞いてもその暴力団の名は知らないものだった。本庁で俺が主に担当していたのが企業犯罪で、切った張ったの暴力団とはとんと馴(な)染(じ)みなかったのである。

「菱(ひし)沼(ぬま)組系ですか？」

「さあ、どうなんでしょう。詳しいことはちょっとわかりません」

菱沼組というのが関東最大の組織であることくらいは知っているが、と思いながら三木と警官のやりとりを聞いているうちに、二階の食堂へと到着した。

「奥のテーブルにいます。銃を向けられたのは神(じん)宮(ぐう)寺(じ)という男で、先ほども言いましたがあの中では一番偉い。役職は若頭だそうです」

こそこそと警官が三木に囁いたあと、「こちらです」と食堂のドアを開いた。

普段であればハーフのラウンドを上がった客たちが談笑しているであろう広い食堂に、客は一組しかいなかった。ぽつりと一人立っていたウエイターが警官の姿を見てほっとした顔になる。

「おおい、ビールだ。ビールがねえぞお」

奥からいかにもといった感じのガラの悪い声が響いてきたのに、制服姿のウエイターの肩がびくっと震えた。

「もういいから、一階に下りてなさい」

三木がウエイターの肩をぽんと叩く。相当ビビっていたのか、若い彼は返事もせずには食堂を飛び出していった。

「さて行くか」

三木が振り返って声をかけたが、彼の目は俺に向けられてはいなかった。

「ヤクザかあ」

憂鬱そうに溜め息をついた宮崎が三木のあとに続き、俺はそのあとに続いて、奥でどうやらそれまで横暴の限りを尽くしていたと思われる暴力団員たちのほうへと向かった。

「なんだよ、ビールはどうした」

ゴルフは紳士のスポーツであるから、ゴルフ場に出向くには一応シャツは襟つき、そしてジャケット着用などの服装コードがある。確かに奥にいた七名の男たちのシャツに襟はあったし、ジャケットも身につけていたが、新(しん)宿(じゆく)は歌(か)舞(ぶ)伎(き)町(ちょう)にいるときそのままのいでたちはクラブハウスでは浮きまくっていた。

中に二人、ゴルフウエアの男がいる。一人はかなりの年配の男で、青ざめたその顔には見覚えがあった。

記憶に間違いがなければ、大手といわれる会社の経営者なのだが、と思いながら俺は、もう一人のゴルフウエアの男に目を移した。

ちょうどこちらに背を向けていたその男は、俺たちが近づいていったことなど興味がないとばかりに、後ろを振り返りもせず煙草をふかしている。後ろ姿、しかも座っているので体型などはよくわからないが、それほどがたいがいい様子はない、瘦(や)せ型で長身の男のようだった。

多分彼が狙撃されたという若頭なのだろう。『優男』といわれたのは多分、彼の髪型のせいもあるのではないかと思われた。真っ黒かつ真っ直ぐな黒髪は肩のあたりまでの長さがある。男にしては長髪だな、などと俺が考えているうちに、三木が彼らに警察手帳を差し出した。

「すみません、ちょっとお話を伺いたいたんですがね」

「警察なんざ呼んじゃいねえよ。ビールはどうしたっていうんだよ」

チンピラの一人が喚(わめ)き立てるのを三木は「まあまあ」と軽いなし、彼らの方へと一歩を踏み出してゆく。聞いたわけではないので単なる憶測だが、三木は多分現場叩き上げの刑事なのだろう。ヤクザ相手に度胸が据わっていることからそれがわかる。一方新人の宮崎は典型的な『頭でっかち』のようで、本物のヤクザを見たのは初めてかと思うほどに顔を強張らせ、立ち止まった位置からは一歩も前を出ようとしていなかった。

「話だったらさっきのオマワリに散々したよ。こちらら被害者だぜ？ いつまでこんなところで足留めさせられんだよ。あ？」

三木が一見好(こう)々(こう)爺(や)に見えるからだろう、粹(じゆん)がったチンピラがますます声を荒立てる。

「いつまでというお約束はできないんですがね。まあ、できる限り早くすむよう、努力はしますんで」

「ふざけてんじゃねえぞ。俺たちだって暇(ひま)じゃあねえんだ。とっとと帰(かえ)らせろって言うんだよ」

一触即発、人を食ったような三木の態度にチンピラたちがいきり立つ。

「お前たちより明(めい)晴(せい)不動産の上(こう)月(づき)社長のほうが忙しいと思うがね」

面倒なことになる前に先手を打とうと、俺は敢(あ)えて彼らの中で一人身を竦(こも)ませていた男の社名と役職を口にした。

途端に男が——上月社長がびくつと身体を震わせ、彼のリアクションに呼応するようにチンピラたちが、うっと息を呑む。

「わ、私はまったくの無関係です。その場に居合わせただけですので……」

額の汗を拭いながら上月がぼそぼそと俺に向かって言葉を発し始める。その様子をチンピラたちが、どうしようというように見守っている中、背を向けて座っていた男の手がずっと上がった。

「上月社長、それ以上は何もおっしゃらないほうがいいでしょう」

張りのある美声。たいして大きな声を出しているわけではないのに、男の声は広々とした食堂内によく響いた。

どこかで聞いたことがあるような——記憶を辿(たど)ろうとした俺の目の前で、男が椅子から立ち上がる。

「ヤクザとゴルフをしていたというだけでは、罪に問われることはありませんからね」

歌うような口調で男は上月にそう言うと、ゆっくりと俺たちを振り返った。流れるようなその動きにさらり、と彼の黒髪が靡く。

「警察も人が悪い。この場でわざわざ社名を出すとは、まるで脅迫ではないですか」

擲(や)揄(ゆ)しているのがありありとわかる口調でそう言い、笑いかけてきた男の顔を見たとき、驚きのあまり俺は思わず、決して小さいとはいえない声を上げてしまった。

「あ」

「……………」

男もまた俺の顔を見て、驚いたように眉を高く上げている。

「お知り合いですか」

茫然と立ち尽くす俺に、横から三木が不審そうな視線を向けてくる。

「……あ、いや……」

まさか、という思いが俺の答えを曖(あい)昧(まい)にした。先ほど聞いた名はそれこそ俺の『知り合い』である彼のものとはまるで違う。

だがどう見ても目の前にいる男は——青龍会というヤクザの若頭だという彼は、俺のよく知る男とあまりにも面差しが似すぎていた。

名は違う。だが彼もまた俺を見て驚いているということは、やはり——？

「刑事に知り合いがいるほど、私は顔が広くはありません」

言いよどむ俺の代わりにとばかりに、男がくすりと笑い、ゆったりした歩調で俺や三木のほうへと近づいてくる。

「はじめまして。神宮寺泰隆です」

軽く頭を下げたとき、またサラリと彼の黒髪が白い小さな顔の周りで揺れた。

見れば見るほど整っているその顔は、十八年前に別れた彼、そのものである。

泰隆——名まで一緒ということは、と改めてまじまじと顔を見返した俺に、神宮寺はにっこりと微笑み会釈を返してきた。

「私の顔に何かついていませんか？」

あたかも初対面であるかのようなよそよそしい素振りをしてはいたが、彼は間違いなく俺の知る男——今朝夢に見たばかりの高柳泰隆、その人だった。

本文 p22～28 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>